川原功司 著
『言語の構造—人間の言葉と動物のコトバ』
名古屋外国語大学出版、二〇二〇年

伊藤 達也

おそらく世界のどの国、どの地域であろうと、二十世紀の後半に言語学をかじったことのある人は、生成文法家という人種の知的火の粉を浴びたことがあるだろう。教室に入るなり、黒板に樹形図を描き、机の上に座って話し始めるタイプの人たち。評者も東京での大学時代に受けたブレント・デシェン先生（この先生は例外的に極めて体系的でオーソドックスな授業をされたが）の音韻論の授業や、原口庄輔先生によるチョムスキーの Barriers の購読（時折飛び出す卑猥な冗談と取り尽く島のない MIT Press の青いテキストの対比）、大学院留学時代のパリで聴いた黒田成幸先生の講演（冒頭で少しだけフランス語で話されたのちに、英語に変わって続けられた講演の後でも、日本語は一言も発せられなかった。）などが思い出される。

生成文法の創始者であるノーム・チョムスキーは日本やフランスに来ると言語学と政治の二つの講演をすることが常である。若いころベトナム戦争に反対し投獄された経験を持ち、九十歳を超え、ボストンからアリゾナに拠点を移してもなおアメリカ政府への辛辣な批判を続けるチョムスキーの姿に人々は、二十世紀に勃興した言語学のラディカルな態度を重ねてきた。難解さゆえアメリカのすべての出版社から出版を拒否された博士論文をオランダで印刷することから始まった彼の理論的探求は、データを理想化し、合理性のみにおいて、ヒトの言語能力（＝心的器官）を解明することを目指し、標準理論、拡大標準理論、原理とパラメータのアプローチ、ミニマリスト・プログラムと枠組みを変えながら常に前進を続けている。生成文法は、その批判として言語の意味的側面を重視する認知言語学や構文文法、言語と社会の関係を分析する社会言語学などを間接的に産み出してきたとも言えるし、ドゥルーズ&ガタリが『千のプラトー』でチョムスキーのツリー構造を批判しリゾームのモデルを提起したことはよく知られている。アンチに対しても二十世紀に残した影響力は甚大である。近年は、進化言語学の分野でも、刺激的な議論を提供しており、再帰性を普遍的特徴とするヒトの言語が突然「マージ」によって生まれたとする最新の学説は本書でも紹介されている。

教科書の体裁を装いながらも、本書はその伝統に連なる知的火の粉を我々に振りかけて来る。本文三〇四頁、四頁の索引が付属し、全体の半分を占める第一章から第三章までが生成文法から発展した学際的言語研究の概説であり、第四章から第十章までは統語現象を扱った各論となる。かなりテクニカルな議論も含まれるが、著者は問題をより広いコンテクストから説き起こしており、読者は一冊でこの分野をリードする国内外の研究者（著者は音象徴と言語起源の関連を考察した自らの二〇一九年の論文をさりげなく紹介するのみだが、もちろんその一人に含まれる）の最新の論点をサーヴェイできる仕組みである。

ただし現在の言語学の全体像の提示はこの本では意図されていない。音声学・音韻論、言語の歴史、社会言語学、言語教育などに興味を持つ向きには、同じ著者の『英語の諸相』（名古屋外国語大学出版）が薦められるだろう。そこでは、通時的な英語の発展、英語の社会的ヴァリエーションなどとともに、マイケル・トマセロなどチョムスキーに批判的な立場も紹介されている。

霊長類研究において世界をリードしている日本だが、かつてチョムスキーをも恐れさせた黒田成幸先生（没後に蔵書は斎藤衛先生の勤務する大学に受け入れを拒否され、残念ながら散逸したとも聞く）を始め、理論言語学でも世界レベルの研究者を生み出してきたのだ。この本をきっかけに後に続く者たちが現れることを祈ろうではないか。